WEEKLY BULLETIN 2023-2024
第2510地区 Rotary 札幌東ロータリークラブ
6月13日（木）第35号
第3086回 例会

本日のプログラム

新会員卓話 大屋勝次 会員

障碍とともに～左手のフルーティスト・建築家として

畠中秀幸 氏

・これまでの半生について

弟の死やフルートとの出会い、さらには脳内出血などこれまでさまざまな経験をしてきました。弟の死は私に二人分生きるという決意を促し、9歳の時にフルートに出会いました。浮気性な脳が常に刺激を求め、中高時代15分ごとに科目を変えた方が情報の定着が良いことが分かり、「英語のような数学」「物理のような歴史」のようにそれらの共通点を感じていました。このことが建築と音楽の二刀流へと私を誘い、健常と障碍の共存という生き方の根底を支えています。音楽と建築・健常と障碍の関係について少し詳しくお話しします。

・音楽と建築について

例えば「音色」という「音＝聴覚情報」と「色＝視覚情報」が共存する言葉があるように、「聴覚的・時間的芸術である音楽」と「視覚的・空間的芸術である建築」はもともと一体であったように感じています。さらに突き詰めると、「時間」と「空間」は元来融合しているのであって、人間が認識するために分けただけだと思っています。このように考えると音楽は時間芸術であると同時に空間芸術でもあり、逆に建築は空間芸術であると同時に時間芸術でもあるともいえます。

私は建築を建築的に捉えると建築しか生まれないので、建築を考える際に目だけではなく耳の感覚を最大限に使っています。そうすると「音楽のような建築」が生まれます。音楽に対峙するときには建築的に捉えることで「建築のような音楽」を生み出したいと思っています。

・健常と障碍について

東日本大震災で世の中が騒然としていた13年前に脳内出血で倒れ、右半身に障碍を負いました。脳が6センチにわたって切れてしまったので一生車椅子かもしれないといわれましたが、「医療的な常識を覆してやろう」とすぐにリハビリを開始しました。右側に感覚の鈍い人が入ってきた不思議な感覚が今でもありますが、運よくステージに戻れるまでに快復しました。障碍は一般的にはハンディキャップと言われますが、右半身と左半身で違う感覚を手に入れたのはむしろアドバンテージだと思います。すべての活動が右と左の対話で成り立っている感じで、その対話が音楽や建築に変換されていると感じるほどです。

・今後について

このような経験や思考を通じて、個性と社会性の幸せなバランスから生まれる本当の多様性とは何か？を探っていきたいと思っています。具体的には、左手のフルーティスト・建築家としての表現活動だけではなく、代表理事を務めている一般社団法人「結び」では、障碍者と社会を繋ぎ、さらには建築やアートや福祉や教育やメディアなど様々な分野の専門家の皆さんを結んで、社会に彩りをもたらしたいと思っています。さらには音楽を介して子供から大人まで世代を繋ぐ北海道吹奏楽プロジェクトの活動も私にとっては重要です。

これからも音楽と建築、健常と障碍を巡る旅は続きます。この不自由ながらも愛おしい右半身とともに…

■本日のロータリーソング

我等の生業

2023-2024年度 国際ロータリーのテーマ
「世界に希望を生み出そう」
国際ロータリー会長：ゴードン R.マッキナリー
CREATE HOPE in the WORLD